In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	急進客観主義と急進主観主義の相克
Author	海老塚 明
Citation	経済学雑誌, 98 巻 5-6 号, p.58-62.
Issue Date	1998-03
ISSN	0451-6281
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学経済学会
Description	<シンポジウム>複雑性・合理性・定常性をめぐって：政治経済学の新たな試み
DOI	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

シンポジウム：複雑性・合理性・定常性をめぐって

急進客観主義と急進主観主義の相克

海老塚　明

I　新たな問題提起——「定常性」から「限定合理性」へ

塩沢氏が，新進気鋭のスラッフィアンあるいは現代古典派としてわれわれの目の前に登場したのは，名著『反省』とともにであった。そこでは，アルチュセールの構造主義的・反「人間主義」の立場から，「イデオロギー的人間学」たる「経済人」を自明の前提にし，それゆえ構成主義的な方法をとる一般均衡論が徹底的に批判されるとともに，またマルクス経済学の労働価値論の「神学」的性格に対しても無効が宣告されたのである。後者の側面に注目するならば，まさに，塩沢氏の問題提起の衝撃は，アルチュセールがマルクス経済思想の核心と見なした「再生産」を軸にマルクス経済学を再構成——そのことによって，マルクス経済学あるいは古典派経済学は一般均衡論に代替しうる可能性を見出すこと——することを要請したことにあったというべきかもしれない。そして，それから7年後，塩沢氏は，『秩序学』において，新たな理論領域へとわれわれを誘うことになる。

> 「均衡論は循環と生成の両者を同時に同じ論理で説明しようとして失敗した。おなじ過ちを犯してはならないが，循環の論理だけでは経済の全体像を把握するに不十分なことは確かである。われわれは循環の論理とともに生成の論理をも明らかにしなければならない。」（『秩序学』，p. 11）

かつての塩沢氏は，「定常性」の存立根拠を社会の物的再生産の必然性に求めていたように思われる。しかし，今や，経済の「定常性」を分析の出発点に据えたうえで，同時にそのような「定常性」を生み出すモメントを解明するという課題を自己に課したのである。このことは，出発点が「定常性」でなければならないにもかかわらず，当の「定常性」を説明するために，別個の出発点を想定しなければならないという難問を塩沢氏につきつけることになる。この難問を塩沢氏はどのように解決しようとしているのであろうか。そして，それは成功しているのであろうか。

塩沢氏の挑戦を見る前に，われわれは次のことを確認しておく必要がある。出発点を「定常性」に置くのは，改めて述べるまでもなく，「主体」を排除するためであった。「経済人」とい

う合理的な「主体」をエレメントとして，その相互作用から経済なり社会なりといった全体を説明する方法——方法論的個人主義——の最も洗練された理論が一般均衡論である以上，それは理論的にあり得る1つの立場表明であった。マルクス派「危機」論に対する塩沢氏の「嫌悪」感の根源もここにあるように思われる。しかし，そのことは「主体」の説明を排除するものではない。例えば，「主体」をこの「定常性」あるいは「構造」の担い手として規定するという方法が考えられる。これは，資本家を社会関係としての資本の人格化として説明しようとする，マルクス自身の方法でもある。現代風に言えば，オートマトンとしての「主体」の規定とでも言えようか。しかし，ここに問題が生じる。第1に，「主体」がオートマトンとして振る舞うという理由は，マルクスにおいても与えられていない。広松渉が提起した「役割行為」論（例えば，『存在と意味』第2巻，岩波書店，1993年，参照）は，まさにこの理論的間隙を埋めようとするものである。と同時に，第2に，オートマトンとしての行動が「定常性」なり「再生産」なりに帰結するかどうかは，アプリオリにそのように仮定しない限り，自明の事柄ではない。以上の問題に対して，塩沢氏が具体的にどのような解答を用意しているのか，それを次に見てみよう。

Ⅱ　塩沢「行為」論の理論的構図への疑問

塩沢氏の理論的構図は次のようになっているように思われる。

出発点は，当然のことながら，「定常性」である。それは，「構造」と呼んでも良いだろう。そのもとでの「主体」の行動は，この「定常性」によって制約されたものとして規定されなければならない。これは，理論的要請であって，このような行動パターンが自律的・半自動的に展開される「定型的・習慣的行動」であるとされる。しかし，ここに，先にも述べた第1の問題が横たわっている。

> 「基本的再生産が阻害されるならば，経済はたちまち混乱に陥り，主体は行動の基準を失ってしまう。事態の定常性は，経済行動の枠組みないし時空を形成しているのである。」（『秩序学』，p. 9）

確かに，各人が生きている世界が今日とほぼ同じように——その「程度」の問題はここでは問わないことにする——明日も続くという，環境の連続性に関するドクサなしには，各人が有する唯一の行動基準である「過去」が意味を失ってしまう。そのため，いかなる行動計画をも立てることができなくなることは自明である。しかし，そのことが「定型行動」を生み出すかどうかは，また別のことである。多くの人間が，日々多くの決断を下すということと，同時にそれを結果としてみれば「ルーティン化」された行動として観察されるということとは別個の事柄である。人々の決断は，社会的に一定の制約条件下で行われ，それが結果として人々の行動が一定の方向に誘導される——これもまた「定型行動」である——というように理解することも可能なはずである。だが，塩沢氏は，そのように議論を立てない。

塩沢氏が依拠するのは，「限定合理性」である。塩沢氏によれば，「人間の行動の多くが習慣にもとづく定型的なものであるのも，その窮極の理由は行動選択が満足原理にもとづいているから」（『帰結』，p. 97）であり，「満足原理」に基づくのは，人間の「合理性」が「限定」されているからであるとされる。それでは，「限定合理性」を有する人間が，どうして「定型行動」をとることになるのであろうか。これに対する塩沢氏の答えは次のようなものである。

「行動が遺伝的にプログラムされている度合いが少なく，想像によって行動に無限の変化をつけることができる人間が，なぜ多くの場合，習慣的に行動するのだろうか。注意と思考の節約のためであると，私は考えている。」（『帰結』，p. 101）

状況は「複雑」である。したがって，それを計算し尽くして，行動計画を立てるには膨大な時間を要する。それゆえ，そのような時間を「節約」し，それをより重要な目的の達成のために利用する。それが，結果として多くの行動を「定型」行動とする理由だとされる。しかし，そうであるとすれば，「最大化」行動を否定したはずであるにもかかわらず，ここでは，計算時間をも含めた「選択」が行われ，その限りで「満足」の「最大化」が図られていることになる。結局，「定型行動」は，主体の「選択」によって生み出されるということである。何故に，「定常性」なり「構造」から出発したはずの分析が，主体の「選択」理論に帰着してしまうのだろうか。問題の根は深いように思われる。そして，それは，塩沢氏の「定常性」あるいは「再生産」の理解に関わっているように思われる。しかし，このことに立ち入る前に，先に触れた第2の問題に対する塩沢氏の考えを見ておこう。

何故に，「定型行動」は，事態の「再生産」を可能にするのであろうか。「定型行動」は，「自律的・半自動的」なものだとされる。行動が，「自律的・半自動的」であるということは，行動がある種の粘着性を有するということである。だとすると，絶えざる「ゆらぎ」の中で，一方向への偏りを持った「定型行動」が，全体の「再生産」を揺るがすことになる可能性を排除できない。もちろん，「切り離し装置」（『帰結』，p. 160）が存在するということになれば，そのような危険性を局所的なものにとどめることになるかもしれない。しかし，場合によっては，「切り離し装置」を支える「定型行動」——ここでは，塩沢氏に倣って，貨幣・金融システムを念頭に置いている——が，局所的な「再生産」の危機を，経済全体の「危機」へと拡大する可能性も考えられる。そうだとすれば，「定型行動」が必ずしも「定常性」あるいは「再生産」を導くことにはならないということになる。

暫定的な結論を述べれば，次のようになろうか。一方において，塩沢「行為」論は，それがトートロギーでないとすれば，「定常性」論とはまったく異質な「主体」の「選択」論に基礎を置く限りで，「定常性」論を出発点としたロジックの延長上にはないということになる。他方において，それは，必ずしも「定常性」あるいは「再生産」を保証しないという意味で，「生成」のロジックは未完成のままである。特に，「定型行動」が各「主体」の「選択」に根拠を置く以上，「生成」ではなく，「発散」のロジックになる危険性さえ存在する。

Ⅲ 「限定合理性」の彼方に

塩沢氏の理論構成が，急進客観主義と急進主観主義の分離状態あるいは折衷的様相を呈してしまうのは，次のような理由によるものと思われる。塩沢氏の「再生産」のイメージは非常にリジッドなものである。それが，リジッドになってしまうのは，その「再生産」が技術係数を所与とした物的「再生産」だからである。しかし，実際の経済については，塩沢氏も「ゆらぎ」を導入するように，現実の社会の「再生産」は，大きな弾力性を有している。同一の機械体系を使用していたとしても，社会経済的要因等によって，技術係数は変動するのであり，技術係数が決定するのは，事後的でしかない。ところが，塩沢氏の場合，生産体系から「主体」を排除したいがために，まさに「主体」に関わる社会経済的要因が初発の段階から排除されてしまっているのである。ありうるとすれば，オートマトンとしての「主体」しか想定できない仕掛けになっているように思われる。しかも，何故，個人がオートマトンでしかないのかという説明は，出発点である「再生産」図式からは出てこない。

「再生産」の理論的要請は，人間行動の規定要因とは成り得ない。そのことが，「複雑系」の「複雑系」たる所以であろう。したがって，「主体」の行動が「定型行動」たる別個の要因を探し出さなければならない。それが，「限定合理性」であったということであろう。一方での急進客観主義おける「主体」の排除が同時に，社会経済的要因の排除を意味しているのと同様に，他方での急進主観主義もまた原理的には社会経済的要因を排除する。その意味では，両者は，表裏の関係にあるということができよう。

しかし，実は，「再生産」の問題は，社会的な「秩序」形成の問題である。社会の「再生産」とは，まさにそれを社会たらしめる「秩序」の「再生産」の問題であって，物的「再生産」——その弾力性の大きさは，戦争時でも社会が物的には「再生産」されていることが示している——は下位問題に過ぎない。そう考えれば，「再生産」論には，始めから「主体」と「秩序」の問題が伏在しているというべきである。確かに，人間の行動には一定の幅があり，その中でさまざまな「選択」が為されている。と同時に，幅があるということは，一定の限界が存在するということでもある。そして，そこに「制度」の問題が介在してくる。

「制度」は2重の効果を有していると思われる。それは，一面では，人々を一定の方向に誘導するという意味で，人々にとって——意識されようがされまいが——「制約」あるいは「拘束」であり，「秩序」を形成する「装置」である。しかしながら，他面では，このような「拘束」をそれぞれが共軛的に分有することによって，「自由」で「自律的」な行動が保証される。この意味で，人々は社会的「主体」（=「個人」）となるのである。この観点からすれば，「制度」は「主体」を形成する「装置」である。このような意味での「主体」と「秩序」は，分析の出発点である「再生産」，「定常性」に組み込まれていると考えるべきである。したがって，企業組織等を分析する際に問題となる「合理性」は，そのような制度的状況において形成され

た「主体」——人間一般ではない——が有する「合理性」であって，人間の能力一般の水準で議論される「限定合理性」——結局，これは「完全合理性」という概念を前提にする——という名称よりも，塩沢氏の「局所的知識」(『秩序学』，p. 67) なる用語に対応した「局所的合理性」の方が相応しい。なぜなら，その場合の「合理性」の基準は，局所的な制度的状況そのものだからである。

おわりに

塩沢氏の議論は，さまざまな視線が張り巡らされており，単純な解釈を拒絶する1個の「複雑系」をなしている。したがって，上記の私見についても，多くの間違いが指摘されることになろう。しかし，最後に一言いっておきたいことがある。最新著『入門』を読む限り，「複雑さ」は，反「均衡」，反「新古典派」という以上の意味を有していないように思われる。それは，アグリエッタ，ボワイエ，リピエッツに代表されるフランスのレギュラシオン派が，「一般均衡」論に対置した「レギュラシオン」という言葉と同様である。両者ともに，その用語の分析的有効性は，今なお，確認されるべき事柄に属しているように思われる。